

---

# ダーク・コントラクト

F a t e

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダーク・コントラクト

### 【Nコード】

N8158D

### 【作者名】

Fate

### 【あらすじ】

幸村拓哉は毎日を怠惰に過ごしてきた。そんなとき、拓哉は一つの事件に関わる事となる。そしてそれは、彼の日常を大きく変えるものとなる。記憶が蘇るとき、再び契約は結ばれる。

## 第一章 ブレイカー

### プロローグ

わたしがそのことに気付いたとき、すでに夕方六時が過ぎていました。

外は暗くなり始めていて、もう校内にはほとんど人がいませんでした。

バスケット部に入っていたわたしは、練習が終わり、家に帰ろうとしていました。

そんなときわたしは初めて、教室に忘れ物をしていることに気付きました。普段なら気付いてもそのまま帰るわたしですが、今回はそういかなかったのです。

慌てて教室に向かったのですが、昼間とは違い、校内は閑散としていて不気味でした。いつもは平気なはずなのに、この日は何かが違っていました。気味が悪くて仕方がなかったのです。

早く取ってこよう。そう思いながらわたしは早足で廊下を歩き続けました。

わたしの通う教室は一階にあるため、すぐに着くことができました。ほとんど時間はかかってなかったはずですが、けれども、最近はずくなるのが早くて、いつの間にか明りがないと、まともなものが見えない状況になっていました。

明りになるものを持っていなかったわたしは、手探りでドアの取っ手をさがしました。

そして取っ手を見つけるや否や、わたしはドアを開けました。

ドアを開けるとそこには先輩の姿がありました。明りがついておらず真っ暗だというのに、何故か先輩の姿をすぐに見つけられたの

です。何で先輩が自分の教室にいるのか。そんな疑問は不思議と湧いてはきませんでした。

「……どうしたんですか先輩。こんなに遅くに」

ついわたしは声に出していました。

すると、ずっと窓の外を眺めていた先輩は振り返りました。暗かったために表情ははっきりと見えませんでした。何となく先輩は笑っているように見えたのです。

「……ねえ」

わたしの質問には答えず、そう呼び掛けてきました。

「あ、はい。何でしょうか」

わたしの声を最後に教室は静まり返り、なんともいえない不思議な雰囲気でした。

けれど静かな雰囲気は、先輩の笑い声が上がると同時に、どこかへ消え失せてしまいました。けらけらと笑う先輩の声からは、いつもの先輩らしさが感じられませんでした。何故か不気味で、いつもの先輩ではない別の何か。そんな気がして仕方ありませんでした。

「皆、消えてしまえば良いのにね」

弾んだ声で先輩は言いました。あまりに普段通りの口調だったため、その言葉を聞き逃しそうでした。

その言葉は錯覚ではありませんでした。はっきりと先輩は言ったのです。

そしてその言葉から、何かいやなものを感じたのです……。

## 第一章 ブレイカー（後書き）

初めまして、F a t eです。

現代ファンタジーを目指して執筆させていただきます。  
それでは、どうかよろしくお願いします。

## 第一章 ブレイカー

1

人々は必ず一人でいるときに「声」を聞く。疲れきった体を引きずって自宅へ向かうとき、誰もいない深夜の部屋でいるとき、眠い目をこすって起き上がるとき。

誰もがその「声」に耳を傾けたはずだ。不意に語りかけてくるそれが、一体何なのかを理解できないままに。

彼らは周囲を見渡す。「声」の正体を見つけるために。

そのとき必ず、彼らは見覚えのない黒いペンダントを見つける。黒光りするそれを不思議に思い、誰もがまじまじと覗き込んだらう。

彼らは顔を近づけ 独りでにペンダントが浮き上がるのを見る。ほとんどの人が驚き、その場から離れようとするだろう。だが、すでにすべては手遅れになっている。彼らはペンダントの影から現れる、この世に存在しえないものを見ることになる。

そして、ほどなく彼らは知ることになる。自分が選ばれたものであり、自分が「契約者」であるということ。

そして彼らは最後に知る。

すでに自分は人間でないことを。

2

午前中で一学期の中間テストが終わると、学校全体が活気を取り戻したようだった。テストのことなど思い出したくもない大半の生

徒は、勉強以外に精を出す毎日へと戻っていた。

都立高岳高校は都心から外れた丘の上に建っていた。高岳市では一番古い都立高校である。丘の上に建っているので通学は不便だが、それだけだった。それ以外の特徴というものは特に何もない。特に荒れているわけでもなければ、締め付けの厳しい進学校なわけでもなかった。勉強する奴はして、しない奴はしない。放し飼いの状態に近かった。

幸村拓哉は鑑賞部の畳の上につぶせに横たわっている。背は高いほうで、だいたい百七十センチぐらいだろう。そしてどちらかといえば細い体つきで、顔立ちも整っているほうだったが、その部分に着目する人はあまりいない。特徴はほとんどなく、総体としてさほど印象に残らない外見だった。

彼が倒れているのは命に別状があるからではない。一夜漬けのテスト勉強であまり寝ておらず、家に帰る前に一休みしているうちに熟睡してしまったのだ。

鑑賞部、という名前は上辺だけであって、実際のところは正式な部活なわけではない。本当は旧校舎にあるただの空き部屋なのだ。そこに拓哉が侵入して使用しているだけだった。もちろん公認されているわけではない。勝手に入り込み、勝手に使用しているのだ。その証拠に、部屋には拓哉の私物が多数持ち込まれている。CDコンボも、積み上げられた漫画も、柔らかそうなクッションも、全部拓哉が持ち込んだものだった。いわばここは彼の秘密基地のようなものだった。

この存在に気付いている生徒はほとんどいない。もちろん教師は誰一人知るはずもない。まさか鍵を掛けているはずの空き部屋が、簡単に鍵を外されて、一人の生徒に占領されているなど、だれが想像するだろうか。

開いた窓から入り込む心地良い風が、白いカーテンを揺らしている。このまま邪魔が入らなければ、拓哉はもう少し惰眠をむさぼり

続けたに違いない　しかし、そのとき部屋の扉が開いた。

現れたのは小柄の女生徒だった。黒目がちの瞳とふつくらとした色白な頬。人目を惹く容姿をしていて可愛いのだが、美人と呼ぶには少し童顔だった。わずかに肩にかかった滑らかな髪の毛が、彼女の規則正しい息に合わせて揺れている。制服の校章の色は拓哉と同じ、二年生を指し示す緑色だった。

彼女は部屋に入るなり畳の方に目をやり、うつ伏せに倒れている拓哉を見た。途端に彼女は顔色を変えた。彼の様子は異変が起こったように見えないこともない。実際は眠っているだけだったが、そんなことを知らない彼女は、慌ててに畳に走り寄る。上履きと学校指定の黒い鞆を放り投げるようにして、彼女はぺたんと拓哉のそばに座り込んだ。そして、自分も畳に顔を近づけるようにして拓哉の顔を覗き込む。

数秒後。

彼女は呆れた顔で体を起こした。規則正しい寝息がかすかに聞こえる。この生徒が暢気に眠っているだけだ、ということに彼女は気付いたらしい。

「……拓哉」

彼の名前を呼び、優しく拓哉の肩を揺する。ぴくりとまぶたが震えるだけで目は開かなかった。起きる様子など全く感じられない。そのかわりに畳の上で九十度回転すると、彼女の膝に背中を預けてくる。スカートからわずかに覗いている彼女の膝に、拓哉の背中が直接当たっている。彼女の頬が少し赤くなっていた。

ふと、彼女は拓哉の声を聞いた気がした。再び拓哉の顔を覗き込むと、彼の唇がかすかに動いている。彼が起きないよう気を配りながら、彼女は拓哉の唇へと自分の耳を近づけていく。

「……ゆき」

そんな言葉だけ聞き取れた。何か夢を見ているのかもしれない。そんな時、拓哉はさっきと同じ方向に寝返りを打とうとした。ぐいぐいと背中をこすり付けられ、スカートが少しまくれ上がろうと



する。

「拓哉、えと……」

彼女は戸惑い、頬は更に赤みを増した。それでも拓哉が起きる気配はなく、まだスカートはまくれ上がろうとしていた。途端、彼女の表情は引き締まる。

その後の行動は素早く、彼女は左手でスカートを押さえつつ、右手を大きく振り上げ、思いっきり拓哉の頬を叩いた。

ぱん、と高らかな音が部屋に響いた。

## 第一章 ブレイカー

拓哉は幼かった頃の自分が、雪原の上に座り込んでいる夢を見ていた。今まで幾度となく見てきた夢だ。この夢を忘れたくて仕方がない拓哉だが、毎日のように同じ夢を見てしまったため、どうしても忘れられないのだった。

夢の内容はいつも同じだった。座り込んだ雪原からは決まって立ち上がれず、常に同じ結末を迎えてしまう。白い雪が赤く染まっていくなを、ただ見ているだけだった。そして最後には。

その瞬間、頭の上に衝撃が降ってきた。

(……雷か?)

目を開けると畳があつた。雷で目が覚めるとは珍しい。

つまらないことに感心しつつ、拓哉は上半身を起こす。誰かに頭を叩かれたような感覚があつたが、さほど拓哉は気にしなかった。それよりも頬の違和感が気になっていた。畳に押し付けていたせいで妙な感覚だった。これで畳の跡がついていたらマヌケだよな、と思いつながら後ろを振り返る。するとそこには同級生の不機嫌そうな顔があつた。

「おお、由愛。おはよう」

あくび交じりに拓哉は言った。

「……おはようじゃない」

由愛と呼ばれた少女はむすつとした顔で言う。

彼女の名前は前田由愛。拓哉と同じ二年生だ。昔から拓哉とは家族ぐるみでの付き合いで、良く言えば幼馴染、悪く言えば腐れ縁といった間柄だった。

「そっぴや珍しいな。由愛がここに来るなんて」

「……返したいものがあつたから」

由愛の口調は非常にぶっきらぼうだった。何となく由愛の機嫌がすぐれていないように見えた。しかし、何故そんな態度を取るのか

拓哉は理解できなかった。

きちんと正座したまま、由愛は鞆に手を入れる。返したいものがある、とは言われたものの、拓哉は何かを貸した覚えがなかった。一体何を返すと言っているのだろうか。

拓哉が少し考えている間に、由愛は鞆の中からそれを抜き出していた。

「はい」

そう言つて由愛はCDを拓哉に差し出す。CD本体をしっかりと保護しているケースには、『クラシック』と細いマジックで書かれていた。それを見て拓哉はついに思い出した。

「ずっと借りたままだったから……」

少し申し訳なさそうに由愛は言った。

「ああ、別に気にしなくていいって。俺も貸した事、忘れてたから」苦笑いして拓哉は答える。

今から二ヶ月ほど前、由愛にクラシックのCDを貸していたことを、拓哉は完全に忘れてしまっていた。音楽関係のCDを多く所持している拓哉だが、枚数の確認や把握をしていないため、拓哉は忘れてしまっていた。このまま何も言われなければ、間違いなく気付くことはなかっただろう。生真面目な由愛の一面を窺える瞬間だった。

CDを無事返したためか、由愛の肩から明らかに力が抜けた。

小さく息をついた後、周囲を見渡し始める。

「……今日は何も聞いてないんだね」

部屋の隅にあるCDコンポを見つめる由愛。見つめるほど珍しいものでも、新しいものでもない。ものすごく古い機種だ。もともとあのCDコンポは、以前ジャンク場に捨てられていたものだ。それを拓哉が修理して使っているというわけだ。もともとそこまで壊れていなかったし、こういうのは拓哉の得意分野だったため、非常に簡単に修理できたのだ。

それからというものの、あのCDコンポはこの部屋に置かれている。

今となつては、この部屋の欠かせない存在となり、拓哉が毎日ピアノのCDを聴いているのだった。

「今日は何も聴いてないよ。ここに来てすぐに寝たからな」

言いながらコンポに近寄る。今思えばこのコンポとはもう二年の付き合いだ。

「今から何か聴くか？」

由愛に背を向けたまま、CDの詰まった棚を見つめる。家から持ち込みすぎたせい、小さな棚だったため、今では大量のCDで溢れかえっている。その中から自分のお気に入りを取り出す。まだ由愛は聴いたことがないはずだ。

「別にいいよ。私そろそろ帰らないといけないし」

「あれ、もう帰るのか？」

予想外の言葉に驚く拓哉。思わず準備している両手が止まる。

「うん。今日は用事があるの」

正座を崩し、由愛はゆっくりと立ち上がる。少し痺れたのか、足取りがぎこちない。

部屋の時計を見ると、まだ十二時過ぎだった。こんな早くに一体何の用事だろうか。少し気になったものの、あまり詮索するのは好きではないので、拓哉は何も言わなかった。

「それじゃ……また明日」

「おお、また明日」

軽い挨拶を交わすと、由愛はさっさと部屋を出て行ってしまった。

3

由愛が出て行って五分ほどしてだった。

再び眠気に襲われ、思わず寝そづになっていたときだ。いきなり扉が開き、そこからひょっこりと男子生徒が顔を覗かせた。拓哉と

同じクラスの佐川達郎だった。刈り上げられた茶髪はなんとも男らしいが、その割に体型は少し太り気味だった。そして両腕に溢れんばかりのパンを抱えていた。

「……今日は一段と多いな」

呆れたように拓哉は言った。

達郎が来ることはもともとから分かっていたため、彼の登場にはさほど驚かなかった。だが、抱えられたパンの異常な多さには目をつぶりたくなる。

「何言つてんだよ拓哉。こんなにたくさん、僕が一人で食うわけないだろ」

靴を脱ぎ捨てて、達郎は畳に上がってくる。

そして拓哉の前まで来ると、抱えていたパンを一気にばらまいた。畳の上に様々なパンが広がるが、どれも甘そうなパンばかりだった。これを全部食べる気なのだとしたら、気が狂っているとは思えない。見ているだけで気分が悪くなりそうだった。

「ほら、拓哉。好きなもの選べよ。僕のおごりだぞ」

誇らしげな顔を見せ、ずいずいと拓哉にパンを押し付けてくる。

「おお、珍しく気前が良いな」

弾んだ声を上げて、拓哉はパンを選び始めた。

拓哉は昔から菓子パン、もとい甘いものが苦手だった。しかし、今回はそんなことを言っていられなかった。ここで引き下がるのはあまりにもつたいない。そう自分に言い聞かせ、拓哉はあんパンをもらうことにした。

「珍しく、は余計だよ。大人しく感謝しとけっ」

面白くなさそうに達郎は言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8158d/>

---

ダーク・コントラクト

2010年10月21日22時16分発行